

「冠婚葬祭のひみつ」

斎藤美奈子(著)

岩波書店 2006年5月12日刊

最近、結婚式や告別式に参加した人は、個人が表に出て、家の意識が消えてしまったスタイルに戸惑われたのではないだろうか。本書は、冠婚葬祭の100年の歴史をたどりつつ、現在進行中の「少子高齢化」あるいは「少婚多死化」の下での結婚と葬儀の新しいあり方を考えてみようという趣旨で書かれたものである。

もちろん本書は巻にあふれている『冠婚葬祭入門』のハウツーものではない。しかし、最新の冠婚葬祭をどう乗り切るかということのを率直かつ辛辣に解説しているのので、どうすればよいのか戸惑っている方にはお読みになることをお勧めする。

第1章で明らかにされているのは、家意識が薄らいできたというけれど、明治になるまでその意識に縛られていたのは武家と豪商ぐらいであり、人口で言えば2%程度であったこと、財産も名字も持たない農民や労働者が重視していたのは家より共同体、血縁より地縁であったことなどである。

第2章では最近の結婚式の新しい「しきたり」をひとしきり、辛口解説をしたあとで、結婚の形について女流評論家ならではのコメントをしている。民法では「夫婦は、婚姻の際に夫または妻の氏を称すると」規定されているにもかかわらず、96.2%の夫婦が夫の姓を選んでいる。長男長女ばかりの現在、本当にこだわらないなら、妻の姓を選ぶ夫婦が半分はいてもいいのにこの数字はなんなのかと疑問を投げかけている。

第3章では「葬送のこれから」と銘打って、葬儀のノウハウを具体的に明らかにしている。いろいろと役に立つアドバイスの中でも、次の点は特に重要だろう。すなわち、身内が亡くなった場合、小学生以上なら通夜、葬儀、告別式、出棺、火葬、収骨、精進落としまで通して付き合わせるべきだということである。人の死が日常から隔離されている昨今、葬儀は死を身近に学べる機会であり、大切な人の死がどれほど人を悲しませるか、子供や若者は知ったほうがいいということである。「勉強に遅れる？そんなことよりお葬式のほうが重要な勉強ですよ。」全く同感である。